九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 漢字圏における継承日本語教育に関する研究 : 年少者の漢字習得の観点から

柳瀬, 千惠美

https://doi.org/10.15017/1931986

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

# 論文題目：漢字圏における継承日本語教育に関する研究
## ―年少者の漢字習得の観点から―
## 要旨

地球社会統合科学府　柳瀬千惠美

海外の非日本語環境で親から日本語を継承する年少者の日本語習得について、研究が先行する英語圏では、漢字学習の困難さや民族コミュニティの重要性が指摘されるが、研究未開拓の漢字圏で調査した柳瀬（2015）はこのような言説と相容れないものとなった。そこで本研究は、漢字圏での日本語継承は非漢字圏とは異なる独自のプロセスであるという観点に立ち、その全体像を示し、漢字圏日本語継承モデルを提示することを目的とする。その枠組みとして、バイリンガルの認知面での言語間転移を説明する Cummins の「二言語相互依存仮説」と、従来の言語環境や言語資源という概念では捉えきれない人や文字、映像、モノとのインタラクションや相互作用を、空間により捉える新しい概念である「トランスナショナル空間」を用いる。

本論文は八章から構成される。第一章で序論を述べ、第二章で先行研究を概観し、研究課題を提示する。先行研究はバイリンガリズム、認知心理学、第二言語習得、継承語分野から本研究に関連するものを概説する。先行研究から多くの示唆があると同時に、その不足点も少なくない。バイリンガリズム分野では幼児期の会話の発達に比べ、読み書きも含めた複数言語の発達には多くの要因が関わることから、多様な事例研究が求められている。継承語分野では英語圏での研究が進む一方で、その他の言語と日本語との関係は未開拓である。認知心理学の漢字語彙研究や第二言語習得では成人を対象とし、年少者を対象としたものは非常に限られる。こうした不足点をもとに、本研究の課題を二つ設定する。

第一の課題は、漢字圏の年少者は日本語の漢字をどのように認識するのかである。第二の課題は、漢字圏の年少者はどのような日本語のトランスナショナル空間において日本語を習得するのかである。

第三章では方法論について述べる。調査は二つの部分から構成される。一つは小学生対象の対話型漢字読み実験、保護者への質問紙調査、インタビュー調査である。もう一つは柳瀬（2015）の調査協力者に対する継続調査である。前者は漢字圏を代表する北京・台北・香港と、比較のため福岡を加えて実施し 160 のデータを得、そのうちの 80 を分析に用いる。後者は北京在住日中国際結婚家庭の日本人母親 27 名に対する追跡調査である。これらの調査結果とデータを量的質的に分析し、考察を統合させて一つの全体像へと収斂させる混合研究法のデザインを立てた。

第四章及び第五章は第一の研究課題に対応する。第一の課題に対して、漢字圏の年少者が日本語の文脈の中で中国語の漢字の意味概念から日本語の未習の漢字を読むことが示され、小学一年生の時点では平仮名習熟、日本語語彙力、認知の発達、漢字知識が転移の重

要な促進要因であることと、日本語のトランスナショナル空間で日本語の漢字を自律学習していく可能性を示した。また漢字圏 3 都市の比較から、簡体字と繁体字の日本語の漢字との字体の相違のあり方が漢字認識に大きな影響を及ぼすことも確認された。

さらに学校教授言語による違いをもとに、日本語の未習漢字に対する認識の違いを明らかにした。すなわち、中国語を学校教授言語とする児童は中国語からの転移で、日本語を学校教授言語とする児童は言語環境や言語経験で得た漢字の知識やイメージで認識する。また香港の国際校児童間の比較では、学校での中国語授業や漢字圏という生活環境に関わらず、漢字の読み書き学習なしには漢字による中国語から日本語への転移が起こらないことが示された。そして漢字読み調査の対話とスキャフォールディング（適宜な支援）を通して、日本語の文脈の中で同根語の漢字を同定することで転移が進むことが示唆された。

第六章は第二の課題に対応する。柳瀬（2015）及び継続調査データから、家庭・学校教育・仮想・現実・家庭外空間において日本語習得が促進される可能性が示された。それぞれの空間には独自の言語資源やインタラクションがあり、なかでも家庭・仮想・現実空間の相互作用による日本語習得と空間を繋ぐ日本人母親の役割の重要性が示唆された。

第七章では総合考察を行う。漢字圏の年少者における漢字の転移を可能にするのが日本語のトランスナショナル空間であり、その空間では日本語の漢字を自律学習していく可能性が示された。このトランスナショナル空間には、日本語習得を促すスキャフォールディングが文脈として、或いはインタラクションとして潜在的に備わっていると言える。また海外で懸念される言語資源の乏しさはトランスナショナル空間の有り様によって解消できる可能性があり、日本語母語話者である親がどのようなトランスナショナル空間を築き、管理し、支援を実践するかが重要である。

最後に、第八章で結論と今後の課題を述べる。

本研究は、次の 3 点において極めて独創的であると考えられる。一つ目はほとんど研究蓄積のない漢字圏での日本語継承について詳細且つ包括的に記述した点にある。二つ目は従来の研究とは異なる新しい手法を考案し、転移の実態を観察し Cummins の仮説を質的量的に実証したことである。三つ目は「境界を越える」視点を言語や空間に適用することで全体像を示すことができたことである。

本研究の意義は、漢字圏での日本語の継承の特徴やプロセスの全体像を示すことで、漢字圏の保護者や教育者に日本語自律学習を支援する際に有用な指針を提供できた点にある。